≪甲子プロジェクト≫

比叡山の神と仏
－その習合思想と利他の教え－

叡山学院教授　武　　覚 超

はじめに

日本の宗教は神道、仏教、諸宗教と多種多様であるが、その特色は神や仏が混在するという文化である。たとえ神や仏への深い信仰や信条を持っていなくても、日本人は正月には神社へお詣りし、また寺へもお詣りして何も矛盾を感じることはない。現在の住宅ではあまり見られないが、かつての日本では住居に神棚や仏壇があり、それらは何の矛盾もなく祀られていた。婚礼は神道の神社で行い、葬式は仏教の寺で行う風習が根付いていることも事実である。このように、日本では神と仏の両方を祀り、詣るということに違和感はなく、むしろ自然なこととして受け入れられている。これらは古来から培われてきた伝統文化であり、それぞれの心の安らぎや拠り所を得るもの、さらには国や世界の繁栄、平和を願うための大切な宗教行事として日常生活に溶け込んでいる。

習合思想とは本地垂迹思想のことで、これは仏教の釈迦について書かれている『法華経』に依っているが、この『法華経』の前半は釈迦の生涯 80 年の活動の真意やその内容が具体的に明らかにされており、迹門と呼ぶ。釈迦は 80 歳で亡くなられた、命のある人間として生まれられた仏である。しかし『法華経』の後半では、その仏は実は無限の命を持った仏であり、その本質は久遠実成、数えきれないほど昔に仏となっており、その仏が我々を導くために姿を変えて出て来られたのがお釈迦様ということである。様々な姿で出てこられる可能性があり、また永遠の生命であることが仏の本質であるが、そこからお釈迦様という人間の姿になって我々を救済しに出てこられた。それを本地垂迹説という。これが仏教の中で、神と仏の関係に結び付けられてきた。本地とは仏、その仏が神として出てこられたと考える。これが本地垂迹説の基本である。中世（鎌倉時代頃）には、逆の本地垂迹説、すなわち神が本地であり、そこから仏が出てこられたという説も唱えられたが、基本的には本地が仏であり、そこから神が姿を現し活動をされている、ということが本地垂迹説の考え方である。

比叡山で取り上げられる神については、日本古来の神々のみならず、インドの神、また中国の神など東南アジアの神々も多く存在する。例えば今回取り上げる大黒天は

摩訶迦羅（まかから）というが、元はインドの神である。この大黒天と仏とはどのような関係にあるのか、日本の神と大黒天とはどのような関係があるのか、ということを見ていきたい。また副題の「利他の教え」とは、神仏の御心のことであるが、これについても触れていきたい。

1. 伝教大師最澄（766～822）による開創以前の比叡山

1-1.『古事記』

比叡山が開かれたのは約 1200 年前、延暦 7 年(788)に一乗止観院(後の根本中堂)が建てられた。これが比叡山仏教の始まりとなる。それ以前の古代では、比叡山はどういう山であったのか。それは日本史の古い史料、『古事記』にある。古事記は和銅 5 年（712）に成立し古代の天皇の歴史を中心に書かれているが、その中に比叡山のことが書かれている。大山咋神（おおやまくいのかみ)、これが比叡山の元々からおられる神の名前であるが、またの名は山末之大主神（やますえのおおぬしのかみ）であり、古事記には「この神は近淡海国（ちかつおおみのくに）（現在の滋賀県）の日枝の山に坐し、また葛野の松尾に坐して、鳴鏑を用つ神ぞ」とある（『日本古典文学大系』1.111 頁)。日枝の山とは比叡山のことであり、葛野の松尾とは、京都嵐山にある松尾大社のことである。この大社は大宝元年（701）に創建されたと伝えられている。この松尾大社の神と、比叡山の大山咋神は同じ神であり、大山咋神が松尾大社にも祀られているということである。古代から比叡山には大山咋神という「神」がいる山として信仰されてきた。

1-2.『懐風藻』

そしてもう一つ『懐風藻』という天平勝宝 3 年（751）に成立した古代の漢詩集があり、その中に麻田連陽春（あさだのむらじやす）の詩が見られる。そこには、「藤江守（とうのおうみのかみ）（藤原仲麻呂・県知事のような役位）の裨叡山の先考（仲麻呂の父・藤原武智麻呂）が旧禅処の柳樹を詠む」とあり、その詩の中に以下のようなくだりがある。

> “近江は惟れ帝里（天智天皇旧跡)、裨叡（比叡山）は寔に神山なり。山静にして俗塵寂み、谷閑にして真理専にあり。於穆しき我が先考、独り悟りて芳縁を闡く。宝殿空に臨みて構え、梵鐘風に入りて伝う。（中略）　寂寞なる精禅の処。（以下略)”（『日本古典文学大系』69.168 頁）

「近江は惟れ帝里」とは、かつて天智天皇が近江に大津京という都を作ったことから、近江は都であるという意味である。その大津京のすぐ西にある山が比叡山である。「宝殿空に臨みて構え、梵鐘風に入りて伝う。」とあることから、先考・藤原武智麻呂

が比叡山に建てた禅処である宝殿では、仏道修行が行われていたのであろうという推測も成り立つ。こうした記述が古代の記録として残されており、比叡山に伝教大師（最澄）が仏教を開く以前から、善き修行の聖地として、また神のいる山として崇められていたことが分かる。

1-3.『山家要略記』

それではその神はどのようにして祀られているのか。それは平安時代の史料『山家要略記』に記されている。

> “一神とは淡海国波母山（はもやま）の小比叡（おびえい）の峰に垂迹す。彼の小比叡峰は吾が国土地の最初なり。彼処に垂迹の神の故に水穂国には地主と号し、日枝山（ひえのやま）には山王と名づく。彼の神聖、寿（ことぶき）して歌を作って曰く、“波母山や小比叡の峰の深山居（ひとりい）は嵐も寒し問う人もなし„”（『山家要略記』神道大系天台神道（下）59 頁）

小比叡峰とは波母山の一峰ということであるが、ここに居る一神が大山咋神である。そして、その日枝山の神は山王と名付けられた。その山王が作った歌が記されている。この波母山とは比叡山絵図の中央上部にある山で、隣の小比叡は現在峰の名前となっている。

> “八王子天神国狭槌尊、人皇十代崇神天皇即位元年（BC97）近江国滋賀郡小比叡東山金大巌（こがねのおおいわ）の傍に天降りたまい、八人の皇子引率（ひきつれて）天降ります。故に八王子と言う”（前掲書、46 頁）

ここでは大山咋神を八王子という名前で呼んでおり、紀元前 97 年、今から 2200 年ほど前に、八人の皇子をつれて金大巌の傍に降りてこられたので、八王子という名で呼ばれるようになったとある。地図には八王子山という 378mの低い山があり、その頂上近くに大岩土公神（どくじん）があるが、ここが金大巌（こがねのおおいわ）と呼ばれる場所である。東から太陽が昇ると岩が小金のように金色に輝いたというその金大巌に、紀元前 97 年に大山咋神が降り立ち、大山咋神が小比叡から八王子山に移って来られたことが記されている。

1-4.『日吉社禰宜口伝抄』

> “崇神天皇七庚寅年（BC91）、詔（みことのり）して牛尾山（八王子山）上の並天塠（あまなみのつか）に坐す大山咋神の和魂（にぎみたま）を山本に鎮座す。”（『日吉社禰宜口伝抄』『官幣大社日吉神社大年表１』）

BC91 年とあるので、八王子山への降臨から 6 年ほど後のことである。和魂とは里に降り立った時の呼び方であり、山本は山の麓を表す言い方である。比叡山の大山咋神が八王子山の上から坂を下っていき、山の麓の東本宮、二宮という社に降りて来られ

たとされている。この『日吉社禰宜口伝抄』に記されているのは約 2100 年前の出来事であり、西暦 2010 年には東本宮遷座 2100 年記念元宮祭が行われた。2100 年前に大山咋神が八王子の山へ移り、そこから麓へ和魂として降りてこられたことを記念して、延暦寺と日吉大社との合同法要が行われた。

こうして比叡山の神は、山本の里にある日吉大社に祀られることとなった。

もう一つ、当時伝教大師が比叡山に入る前に神を祀っていた場所が、西本宮の大宮である。これは天智天皇が 7 世紀後半に大津京に都を置かれたとき、奈良の三輪大社から神を招いたというのが定説となっている。この三輪明神は天皇の守り神として高い位を持った神とされており、天智天皇即位の際にこの神を比叡山に招き祀ったと言われている。また他にも、比叡山を開いた伝教大師が比叡山の守護のために祀ったという説もある。

こうしたことから見ていくと、古来からの比叡山には、東本宮の大山咋神（小比叡明神や二宮とも呼ばれる）と、西本宮の大己貴神（おおなむちのかみ）（三輪明神や大宮とも呼ばれる）の 2 神が祀られており、そこに伝教大師によって比叡山の仏教が開かれたということになる。この伝教大師と比叡山の神との関係を述べていきたいと思う。

2. 伝教大師最澄と神祇

2-1. 最澄の誕生

それは伝教大師の誕生から始まる。伝教大師について書かれた伝記史料であり、伝教大師が亡くなった後間もなく纏められたという確実な根本史料『叡山大師伝』がある。滋賀県の石山寺にその写本が重要文化財として現在も残っている。

その中にこういうことが書かれている。

> “父の百枝（ももえ）、常に子無きを念（おも）い祈願懐（いだ）くことあり、男子を得んが為に山に登り地を択びて（中略）叡岳の左脚・神宮の右脇に至るに比（およ）んで、忽然（こつねん）名香馥郁として（中略）幸いに験地を得て草庵を創造す。今、神宮禅院と呼ぶもの是れなり。一七日を期して至心に懺悔するに、四日の五更（あけがた）、夢に好相を感じて此の児（最澄）を得たり。”（『叡山大師伝』伝教大師全集五。付録 2～3 頁）

父は子どもがなかったので、この比叡山の神に男の子が授かるようお祈りをされた。その場所が神宮禅院と呼ばれる。比叡山の地域を説明すると、比叡山の頂上は標高 848 メートルあり、これを大比叡の峰といい三輪明神と同じ名前である。ここに根本中堂、東塔という比叡山の中心堂塔伽藍がある。そこから峰道という横川へ行く道があり、横川へ行く途中に小比叡という峰がある。ここに降り立ったのが大山咋神ということであった。これをもう少し下へ降っていくと、八王子山という 378 メートルの山がある。更に大山咋神が降り立ったところである。小比叡峰から八王子山の方へ向いそこ

から里へ神が下ったが、この山自体が神体山であり八王子山を神宮という。

『叡山大師伝』に出てきた神宮禅院というのは、比叡山の峰、叡岳（大比叡峰）から琵琶湖を見たときの叡岳の左端の方、神宮の右側の辺りにある、現在、神宮寺（三面大黒を祀っていた記録がある）が建てられている場所のことである。ここが、伝教大師の父が子を授かるよう祈った場所とされるところである。

2005 年から 2006 年にかけて、大津市教育委員会が神宮禅院の発掘調査をしたところ、初めに室町時代の建築遺跡が出現し、そこからさらに 20 ㎝程掘ると 10～11 世紀頃の遺構が出てきた。さらに掘り進めると奈良時代の建築の痕跡が出てきた。そのことから、ここがおそらく伝教大師の父が祈った場所で間違いないであろうと証明された。

このことからも、日本の仏教の根本を開いた伝教大師最澄は、比叡山の神から授かった子、神の子と言っても良い。最澄自身も比叡山の神を深く信仰し、比叡山に仏教を開いていく上での守護とした。このことは最澄の『六所宝塔願文』（818 年成立『伝教大師全集』五-373 頁）や、『長講法華経発願文』（『伝教大師全集』四-245.242 頁）に書かれている。

2-2.比叡山の主神

『長講法華経発願文』には、仏の法、仏教の教えを守り、これを盛んにして国を鎮め護るためには、仏の加護、菩薩の加護、神々の加護、それぞれが必要であるということと共に、比叡山の神の名前も記されている。それが天智天皇によって比叡山に招かれた三輪明神「大比叡山王（おおびえいさんのう）」（大己貴神（おおなむちのかみ）、大宮）と、比叡山に元から鎮座する地主神「小比叡山王（おびえいさんのう）」（大山咋神（おおやまくいのかみ）、二宮）である。その大小比叡の二神を、比叡山の仏教を開くに当り、最も大事な守護神としたということが書かれてある。（『日本三代実録』新訂増補国史大系 628 頁）

ここから、伝教大師最澄が、比叡山の山王すなわち大比叡・小比叡山王を深く信仰し帰依尊崇されていたということがわかる。

2-3.最澄企画の主要堂舎九院

伝教大師は、単に比叡山の山王だけを守護神としていたということではない。そのことが、最澄が企画した主要堂舎九院（『九院事』(818 年成立)『伝教大師全集』五-375 頁）に記されている。最澄が比叡山を開いた際に、比叡山をこのような仏教にしていきたい、このようなお堂を建て、このような実践をして、このような教えを広めていきたい、とした内容のそれぞれの象徴となる寺を企画したことが記されている。その寺群の一番根本となるのは一乗止観院（根本中堂）である。

比叡山仏教は、中国の釈迦と呼ばれる隋代天台大師の教えこそ、真の仏教であり、我々日本人を救済する大切な教えであると考えた伝教大師が、命を懸けて中国に渡り、天台大師の教えを日本に持ち帰って比叡山を開いたのである。この天台大師の教えの、

拠り所は『法華経』であり、実践のことを止観という。仏道修行で大事なことはまず心が安定することである。心の浮き沈み喜怒哀楽を離れる、「止」とはこうした心の状況を言い、何事にも動じない静寂な精神状態のことを指す。これが仏道修行の基本である。そのうえで、「観」というのは正しくものを見つめるということであり、真理を見つめるということ、すなわち我々の人生やこの世界をきちんと正しく見つめるということが仏の大切な教えである。

「止」と「観」のこの二つができれば悟りに繋がるということが、天台の根本の教えであることから、根本となる寺（お堂）の名を一乗止観院と称したのである。それが伝教大師の修行する根本道場であり、ここに比叡山仏教の基本がある。

また、前述した九院の三番目にある総持院は、真言密教の根本道場である。真言密教は伝教大師が遣唐使として中国へ行ったときに最初に日本に持ち帰った教えであり、桓武天皇に大変信頼された修法として知られる。これも比叡山の仏教の基本となっている。

他にも、修行する者の心構えや生活の定めの守り方を授かる戒壇院、西塔に建てられた西塔院、浄土を象徴する浄土院、伝教大師が比叡山の神（山王）と出会った場所に建てられた定心院、インドの四天王の神（東西南北の守り神）を祀る四王院、インドの天竜八部衆を祀る八部院、比叡山の地主神、山王を祀る山王院を合わせて、全部で九院を建立するよう『九院事』に記されている。この中のほぼ半分の四つの寺（定心院、四王院、八部院、山王院）が、神を祀るためのものである。インドの神も日本の神も崇めるべきとし、仏法守護の神とするという伝教大師の基本的な考え方が現れている。

2-4. 神仏習合の根幹

九州の宇佐八幡・賀春（かわら）神宮寺などは、船の航海を護る神として当時信仰されており、遣唐使の無事帰還は、これらの神々のお蔭だと考えられていた。伝教大師が 49 歳の時、この宇佐八幡宮・賀春（かわら）神宮寺に入唐求法無事の神恩を報謝し、造像写経や『法華経』講説を行ったことが記録にみられる。また、814 年には大阪の住吉大神に詣で、一万灯を供し大乗経典を読んだとある。双方とも航海の無事を報謝したものである。

このように、伝教大師は仏のみならず多くの神々に深い信仰を持っていたことが分かる。これが、その後の神仏習合の根幹になってくるのである。

3. 慈覚大師円仁（794～864）と神祇

3-1. 円仁と横川根本如法塔

神仏習合の根幹のもう一つに、最澄の弟子である慈覚大師円仁の存在がある。円仁は唐代に会昌の廃仏という廃仏事件に遭遇したことなどを含め、最後の遣唐使として

唐で過ごした9年3か月の様々な体験を『入唐求法巡礼行記』という旅行記にまとめた人物である。

この円仁がまだ唐へ行く前に籠山12年修行を行い、当時東北で起きた大地震の救済のために様々な活動や寺院建立に携わるなどをするうちに大病を患った。円仁40歳の時である。円仁は比叡山の最も北にある横川に小さな庵を立てて療養に入るが、療養中でも可能な本格的な修行として『法華経』の写経を行った。写経は、天台宗では止観の修行の一つとして悟りを目指す大切な修行と考えられており、円仁も写経を続けるうちに体力を取り戻し、その後唐へと派遣されるに至った。円仁が『法華経』の写経を収めるための塔を建てたことが『沙門壱道記』(867 年成立、大正蔵図像十一、630ｃ）に記されている。『沙門壱道記』によれば、円仁創建の横川根本如法塔に納める如法経（『法華経』）守護神として、円仁が天長年中（824～833）に十二支になぞらえて次の十二神を勧請し、毎日を護って頂くようにしたという。

一番子日−伊勢大明神、二番丑日−八幡大菩薩、三番寅日−賀茂大明神、四番卯日−松尾大明神、五番辰日−大原大明神、六番巳日−春日大明神、七番午日−平野大明神、八番未日−大比叡大明神、九番申日−小比叡大明神、十番酉日−聖真子大明神、十一番戌日−住吉大明神、十二番亥日−諏訪大明神

3-2. 赤山明神の勧請

のみならず、慈覚大師はこれまで日本に存在しなかった新羅の神も勧請した。それが赤山明神の勧請である。円仁は中国（唐）へ渡り多くの苦難に遭遇したが、それが無事に終わったのは新羅の神である赤山明神のご加護のお蔭であるとして、晩年に遺言を残した。それによって、888 年に赤山明神を本尊とする赤山禅院（京都市左京区）が創建された。

天台宗は、天台仏教の護り神として中国の赤山明神を重要な神とし、日吉山王の神と共に祀られることとなった。(寛平入道撰『慈覚大師伝』続天台宗全書、史伝 2、70～73)

3-3. 毘沙門天の奉祀

円仁は毘沙門天（インドの神）も深く信仰していた。円仁が中国へ行く際に大風に遭遇し南海に没せんとしたが、観音力を念じたところ毘沙門天が現れ、嵐が静まったという霊験により、帰国後、横川中堂を創建して聖観音像と毘沙門天像の二尊をお祀りしたということが記録に残っている。(『阿婆縛抄』日本仏教全書 60、280 頁・『兵範記』史料大成兵範記四、318～319 頁)

これが横川中堂建立の縁起であり、聖観音菩薩と入唐の際に現れた毘沙門天を本尊として祀ったと伝えている。観音菩薩は、様々な姿となって我々を救う。仏、あるいは神、あるいは王となり、また小さな男の子や女の子に姿を変えるなどして、我々を

導いていかれる。円仁の場合は、毘沙門天となって現れたと伝えている。

4. 智証大師円珍（814～891）と神祇

4-1. 円珍と年分度者

慈覚大師は比叡山の第三世座主であるが、智証大師円珍は第五世座主である。平安時代約 400 年の中で正式に朝廷から大師という称号を頂いたのは、日本では伝教大師と慈覚大師、その後弘法大師、そして智証大師、この四人だけである。100 年に一度と言われる偉大な祖師方である。その一人である円珍も中国に赴き、多くの仏法を中国から伝えた。この智証大師の時に、大比叡・小比叡両神のために年分度者を賜った。年分度者とは比叡山で育てる人材であり得度して僧侶としての修行に入る者のことを言い、各宗派から選抜され朝廷に認められた者で、人数が限られていた。当初天台宗は２名であったが、智証大師の頃は 10 名ほどとなった。神分として年分度者を賜ったことについて、史料には以下のように記されている。

> “ 勅して延暦寺年分度僧二人を加試す。其の一人は大毘盧遮那経業、大比叡神分と為す。其の一人は一字頂輪王経業、小比叡神分と為す ”（『日本三代実録』国史大系 628 頁）

4-2. 山王三聖の確立

山王三聖は円珍の頃に確立したということが最近の研究で分かってきた。山王三聖とは、大比叡明神・小比叡明神・聖真子明神のことである。円珍は『円珍制戒文』の中で、以下のように述べている。

> “ 大小比叡山王三聖の出世の本懐は、仏の知見を開示し国土を利益するなり ”（『円珍制戒文』888 年円珍筆、園城寺文書Ⅰ・382 頁）

出世とは神や釈迦などがこの世に出られること、本懐とは、その際に抱いている本当の願い事である。円珍は、仏や菩薩は皆に仏の知見・智慧を与え、国を繁栄させて利益を与えるが、神（山王三聖）の本懐も、そうした仏の知見を開示することにあるとした。これはまさに神仏一体の思想であり、伝教大師の弟子である智証大師の時代には、こうした考え方が確立していたということである。

5. 相応（831～918）と神祇

5-1. 客人社

慈覚大師の弟子、相応和尚は比叡山の千日回峰行を始めた人物である。相応和尚は、慈覚大師が中国を巡礼した苦労にちなみ、巡礼を修行にした。比叡山の最も南の無動寺谷を開いた相応和尚について、次のような記録（趣意）がある。

> “855 年、東塔無動寺谷開創の折、白山（しらやま）権現（白山比咩（しらやまひめ））を勧請して客人（まろうど）社を建立する”（相応撰『検封記』続天台宗全書・史伝 2・132）

これには物語がある。相応和尚が無動寺を開こうとして向かう道中に一人の女性と出会った。女人禁制の山の筈なのにどうして女性がいるのかと訝る相応和尚に女性は、「私は神です。白山比咩（しらやまひめ）と申します。あなたを助けるためにやってきました。」と述べたという。客人社の客人とはつまりこの神のことをいう。そうして比叡山に白山という神が祀られることとなった。

5-2. 相応と建造物

相応和尚は比叡山の神社（山王社）に仏教の建物を建てたり、神殿を造立整備した人物でもある。887 年、大宮社（大比叡明神）の前に『法華経』一部を収める宝塔を建立した。仏法に基づく建造物を神社の前に建てたということである。さらに華台大菩薩（小比叡二宮）の宝殿も造立した。これは現在国宝となっている。また 890 年には、法宿大菩薩（大比叡大宮）の宝殿も建てられている。

6. 慈恵大師良源（912～985）と神祇

慈恵大師は、元三大師と呼ばれ厄除けの大師としてよく知られている。慈恵大師の寺が筆者が住職を務める寺であるので、ここで紹介しておきたい。古絵図には走井橋の近くに慈恵大師里坊とあるが、これが現在の求法寺というお寺である。慈恵大師はここで 12 歳の時に家族と別れ比叡山に入る決意をされたと伝え、法を求むという意味で求法寺と呼ばれている。この慈恵大師良源という僧は、比叡山を再興された方である。特に比叡山の根本中堂の今の建物の規模はこの方が確立された。現在の根本中堂は織田信長の焼き討ち後、江戸時代に徳川家光によって再建されたものであるが、その元の形は良源によって作られたものである。

また慈恵大師は、比叡山に祀られている地主三聖（小比叡、二宮・大比叡、大宮・聖真子、宇佐八幡）の祭事を始めた人物でもあった。現在でも湖国三大祭りとして、長期にわたる大きな祭りで知られているが、良源はこの祭りの源流を成す祭事を始め

ている。

琵琶湖にある唐崎に、神殿・鳥居・回廊を二宇、雑舎を四宇、また宝輿（神の乗り物、神輿）一基を作って、盛大に祭りを行った。この時、伶人二十余人を竜頭鷁首の船に乗せて坂本の琵琶湖岸富津浜から唐崎まで船渡御をし、輿を傍らに音楽を奏で、歌ったり踊ったりしたと当時の史料にある（『慈恵大僧正拾遺伝』続天台宗全書・史伝２・206）。ここに、慈恵大師の祭事が現在の日吉山王社の祭の起源をなすということが確認できる。

7. 山王七社、山王二十一社の成立

比叡山では様々な神との深い繋がりがある。この繋がりは具体的にどのように捉えられているのであろうか。

歴代座主の記録である『校訂増補天台座主記』や、『百錬抄』によると、保安2年(1123)の記事に、大宮・二宮・聖真子・八王子・三宮・客人・十禅師の七社の七基神輿による入京強訴の件が見られる。当時、この七基の神輿を僧兵が担いで京に強訴へ行ったということであるが、大阪大学名誉教授の平 雅行氏（『叡山学院研究紀要』42 号 2020 年）によれば、これは、当時の武士による強権的な政権に反する民衆運動であった、という見方ができるという。比叡山で僧兵たちが神輿を担ぎ上げ、そのまま雲母坂をおりて京都に強訴へ向かうわけであるが、朝廷の立場ではこの僧兵たちは悪僧かもしれないが、民衆の側からすれば、武士の行為を改めさせる一つの抗議であったという評価をしている。こうした強訴は室町時代から度々行われていた。

当時の神輿は七基全て国宝として現存しており、現在でもこの七社の神輿で神輿渡や船渡御が行われている。こうした史料記事から、平安末の十二世紀にはこの七社が成立していたことが分かる（『校訂増補天台座主記』80 頁、『百錬抄』）。

また、1140 年頃に書かれたとされる、日吉山王の記録の中でも最も古いものの一つである『耀天記』の中の「山王事」においても、七社の名前が出てきている（菅原信海『山王神道の研究』137 頁参照）。二社が三社になり、段々と増えていき、1100 年代頃に七社が成立している。七社が成立してからおよそ 100 年後の鎌倉時代（十三世紀初頭）になると二十一社が成立する（村山修一『比叡山寺』1978 年、20 頁）。

8. 山王二十一社の名称と本地仏一覧

以下は、山王二十一社と仏との関係を表で表したものである。

(1) 上七社

現社名	祭神名	旧称	本地仏
西本宮（三聖）	大己貴神（おおなむちのかみ）	大宮（大比叡（おおびえい））	釈迦如来
東本宮（三聖）	大山咋神（おおやまくいのかみ）	二宮（小比叡（おびえい））	薬師如来
宇佐宮（三聖）	田心姫命（たごりひめのみこと）	聖真子（しょうしんし）	阿弥陀如来
牛尾（うしお）神社	大山咋神荒魂（あらみたま）	八王子（はちおうじ）	千手観音菩薩
白山姫（しらやまひめ）神社	白山姫神	客人（まろうど）	十一面観音菩薩
樹下（じゅげ）神社	鴨玉依姫（かもたまよりのひめ）神	十禅師	地蔵菩薩
三宮（さんのみや）神社	鴨玉依姫神荒魂	三宮	普賢菩薩

(2) 中七社

現社名	祭神名	旧称	本地仏
大物忌（おおものいみ）神社	大年（おおとしのかみ）神	大行事	毘沙門天王
牛御子（うしのみこ）社	山末之大主（やますえのおおぬしのかみ）神荒魂	牛御子（うしのみこ）	大威徳明王
新物忌（しんものいみ）神社	天知迦流水姫（あめちかるみずひめのかみ）神	新行事	持国天（又は吉祥天）
八柱（やばしら）社	五男三女神	下八王子（しもはちおうじ）	虚空蔵菩薩
早尾（はやお）神社	素戔嗚（すさのおのかみ）神	早尾	不動明王
産屋（うぶや）神社	鴨別雷（かものわけいかづちのかみ）神	王子	文殊菩薩
宇佐若宮（うさわかみや）	下照姫命（したてるひめのみこと）	聖女（ひじりめ）	如意輪観音菩薩

(3) 下七社

現社名	祭神名	旧称	本地仏
樹下（じゅげ）神社	玉依彦（たまよりのひこ）神	小禅師	竜樹（又は弥勒）
竈殿社	興津彦（おきつひこのかみ）神・興津姫神	大宮竈殿	大日如来
竈殿社	興津彦神・興津姫神	二宮竈殿	日光菩薩・月光菩薩
氏神（うじがみ）神社	鴨建角身命（かもたけつのみのみこと） 琴御館宇志丸（ことのみたちうしまる）	山末	摩利支天
巌滝（いわたき）社	市杵島姫命（いちきしまひめのみこと） 湍津島姫命（たきつしまひめのみこと）	岩滝	弁才天女
剣宮（つるぎのみや）社	瓊瓊杵（ににぎのみこと）命	剣宮（つるぎのみや）	不動明王
気比（けひ）社	仲哀（ちゅうあい）天皇	気比（けひ）	聖観音菩薩

西本宮の大比叡の大己貴神は、伝教大師が山に入られる以前から鎮座していた神である。本地仏は釈迦如来である。そして東本宮の大山咋神は比叡山に元々からおられた神である。小比叡の神とも呼び、こちらは比叡山の根本中堂と同じ薬師如来が本地仏である。それから宇佐宮には田心姫命がおり、阿弥陀如来を本地仏としている。

これが実は、比叡山の東塔、西塔、横川に当てはめてられている。

東塔の根本中堂本尊が薬師如来であり、東本宮の大山咋神の配当となる。西塔には釈迦如来を祀る釈迦堂があり、それは西本宮の大己貴神に配される。そして横川は念仏が発祥した場所であるが、阿弥陀如来を本尊としているため、宇佐宮は横川に配当されている。東本宮、西本宮、宇佐宮の三聖は、それぞれ東塔、西塔、横川に配当されている。

七社の他の神社について、牛尾神社の旧称八王子は大山咋神が山に降り立った場所であり、山に現れる時の呼び名である荒魂を祭神としている。これは八王子の山の上に祀っている。ちなみに里に降り立った場合は和魂（にぎみたま）と呼ばれる。同じ神体であるが山と里では名前が異なり、神輿や神社も別に作られる。白山姫神社の白山姫神は、先に述べた相応和尚が祀った神である。樹下神社の鴨玉依姫神は大山咋神の妻である。こちらは里に降りた神として祀られ、山に降り立った際の鴨玉依姫神荒魂は三宮神社に祀られている。両者は同じ神であるが、神社の名前や本地仏も異なっている。

その他、例えば中七社の大物忌神社の大年神は大山咋神の父であり、猿の顔をしているなど、色々な神が祀られている。このように、比叡山に祀られている神々は全て仏や明王、菩薩と一体であるというのが、比叡山仏教の基本的な考え方である。それは例えば、現在も続く回峰行という行の場合、回峰行者は必ず日吉大社を全て回るのであるが、お参りする際には神の名前を唱えるのではない。例えば大宮へ参る時は、本地仏である釈迦如来が『法華経』の教主であるため、回峰行者は『法華経』の偈文を唱え、また釈迦如来の真言を唱える。或いは、宇佐八幡（聖真子）には『華厳経』というお経があり、その中に阿弥陀仏のことが書かれた文章がある。『往生要集』の中に取り上げられているものであるが、宇佐八幡に参る回峰行者はその文章（念仏）や阿弥陀如来の真言を唱える。

このように、比叡山の延暦寺と日吉社とは一体なものであるということである。逆に言えばこれは日吉社の仏教化ということでもあり、現在全国に三千ほどある天台宗寺院の多くには日吉山王社が祀られており、天台寺院の鎮守という形になっている。

9. 比叡山の大黒天

では比叡山の大黒天とはどのように考えられていたのであろうか。

1348 年成立の光宗撰『渓嵐拾葉集』、及び 1734 年成立寒川辰清（さむかわときよ）編『近江輿地（よち）志略』などの史料を参考に以下に解説していく。まず『渓嵐拾葉集』〔(1)～(12)〕を取り上げる。

(1) “ 名を得る事、示して云く、梵には摩訶迦羅と云い、之には大黒天と名づく。 ”（『大正新脩大蔵経』注:以下『大正蔵』76・634a）

大黒天という名前についての記述である。梵とはインドの古代語、サンスクリット語のことであり、マカカラあるいはマハカーラとも呼ばれる。日本語名では大黒天と名付けられた。

(2) “ 三摩耶形の事、示して云く、或いは袋、或いは槌、或いは如意珠、或いは智剣、或いは宝棒、或いは鉾、或いは斧也。”（『大正蔵』76・634a）

三摩耶形とは、仏や菩薩、神などが人々を救うための誓願を具体化したもののことである。福袋に代表される「袋」、打ち出の小槌の「槌」、様々なことが叶えられる「如意珠」、「智剣」とは智慧の剣、不動明王も持っており、正しい道が開かれると言われる。その他様々な物を大黒天は持っている。

(3) “ 尊形の事、示して曰く、南海伝或いは神愷記に依れば、老翁の形にて梨打烏帽子を着け、左手に袋を持ち、右手に槌を持つなり。是れ世間流布の尊形是れなり。”（『大正蔵』76・634b）

尊形とは姿のこと。『南海伝』とは中国唐代の７世紀～８世紀初め頃に、義浄という僧侶がインドや東南アジアを旅して多くの仏典を中国へ持ち帰った時の、『南海寄帰伝』という旅行記である。これら史料によると、大黒天は老人の姿で烏帽子を着けているとある。烏帽子とは、中国唐代（7 世紀）の烏沙帽に由来すると言われている。左手に袋、右手に槌を持つこの姿は、中国で言われている姿である。

(4) “ 秘記に云く、摩訶迦羅天は黒色の三面六臂にして大悪忿怒形なり。赤い火焔・鼠蛇・瓔珞・髑髏を彼の衣に著せり。”（『大正蔵』76・638b）

黒色の三面六臂とあるが、この黒い姿が大黒天と言われる所以である。三面六臂なので顔は３つある。しかも恐ろしい怒りの顔をし、炎や鼠、蛇、髑髏などを衣に着けている。

(5) “ 大黒天を闘諍の神と為す事。示して云く、大国には合戦の時、大黒天神を以って前陣に立てて、戦場に向かうなり。この大黒は人肉を喰らう神なり。よって奪精鬼と名づく。故に此の神は屍堕林に住したまうなり。能く群賊の恐れを除くなり。孔雀経の説これなり。”（『大正蔵』76・636a）

（4）にも関連するが、大黒天は戦いの神である。大国が合戦の際に大黒天を前陣に立てるほどである。「奪精鬼」とまで名づけられているが、「群賊の恐れを除く」とあるように、信者ではなく害をなす悪人を恐れさせると『孔雀経』には書かれている。

中国の大黒天はこのようであるが、比叡山ではどのように考えられていたのか、以下（6）以降で見ていく。

(6) “ 山門相承の大黒は、本経儀軌には依らず、山家（さんげ）大師（最澄）の御感見の様に作したまえり。ゆえに高祖大師が我が山を開闢せられし時、大地は六種に振動し、下方空中より一人の老翁涌出せり。其の形は今の政所の大黒の相貌是なり。（中略）又云く一人の老翁を安んじて三千衆徒養育す。（中略）老とは久成正覚の義なり。翁とは俗諦常住の義なり。（中略）吾が山開闢の時、一人の老翁、下方より涌出して吾が山の護持を致す。しかのみならず大師、最初御登山の時、霊山浄土の義式皆悉く吾が山に顕現す。宝塔、虚空に涌現し二仏並座（びょうざ）したまう。故に霊山一会、儼然として未だ散せずと釈したまうなり。（中略）其の本地と云うは、即ち一代教主釈迦如来なり。又三輪明神の和国影現の形にして、即ち今の大黒の相貌なり。本地に約する時も大黒なり、垂迹の時も山王即大黒なり。故に吾が山の大師は此の尊を崇敬したまう事良に由あるなり。”（『大正蔵』76・634b）

山門に伝えられている大黒天は、経典や史料に依っていないとある。山家大師が感得した大黒天なのである。高祖大師（最澄）が山を開いた際、大地が振動して一人の老人が涌き出、その姿は政所の大黒の姿だった。また伝教大師が初めて比叡山に入った時、『法華経』の浄土の義式が山に現れた。宝塔が空中に現れ、多宝仏と釈迦仏が並んで座った。これはつまり『法華経』の世界を表している。『法華経』の世界であるので、本地仏は即ち教主の釈迦如来となるのである。

そして、三輪明神（大比叡明神・大宮）として現れた姿がそのまま大黒天であるという。釈迦を大黒天の本地と考え両者を同一として、その上で三輪明神に姿を現したということで、この三つを一体の物とするという考えである。

(7) “ 又示して云く、我が山の山王影向の時は大黒天神の形なり。云云大宮権現を俗形と習う事之れ有り、これを思うべし。”（『大正蔵』76・636a）

比叡山に現れた時は大黒天の姿であったが、三輪明神の大宮権現は俗の姿ということである。

(8) “ 山門大黒の事、示して云く、山家（さんげ）御相承の大黒とは多聞大黒なり。故に其の相貌は皆、毘沙門の形なり。口伝云云　東寺大黒の事、示して云く、弘法の伝来は神愷軌の形の如し。即ち是れ不動大黒なり。口伝云云。”（『大正蔵』76・634b）

比叡山で伝えられている大黒は多聞天（毘沙門天）である。ところが、東寺では弘法大師によって大黒天は『神愷軌』で説く不動明王の姿であると伝えられている。ともに口伝で伝わっている。

(9) “ 此の尊の異形の事、示して云く、或いは不動一体、或いは愛染一体の事、或いは毘沙門一体の事、或いは弁才天一体の事、或いは聖天一体の事、或いは吒天一体の事、或いは山王一体の事、或いは降三世一体の事、或いは大日一体の事、或いは釈迦一体の事、或いは観音一体の事、或いは文殊一体の事。巳上十二尊。是の如き等の種々の習い之れ有り。口伝別に在り更に之を問うべ

し。”（『大正蔵』76・634c）

大黒天の姿には色々な説がある。(8) で見たように不動明王や毘沙門天と一体であるのみならず、愛染明王とも、毘沙門天とも、弁才天とも一体であり、その他、釈迦如来や大日如来なども含めて十二の神々と一体であるとされる。比叡山ではこのうち毘沙門と弁天を加えた大黒・毘沙門・弁天の三面一体の大黒天としている。そして本地仏は釈迦である。

(10) “ 大黒天神法、喜祥寺神愷記。大黒天神とは大自在天の変身なり。五天竺並びに吾が唐朝の諸伽藍等皆安置する所なり。有る人云く、大黒天神は堅牢地天の化身なり。伽藍に之を安置し、毎日炊く所の飯の上分を此の天に供養す。誓って夢中に語る詞の中に云く、吾を若し伽藍に安置し日々敬い供すれば、吾が寺の中に衆多の僧を住せしめ、毎日必ず千人の衆を養わん。乃至人宅も亦爾なり。若し人、三年心を専らにして吾を供養すれば、必ず此に来って供人に世間の冨貴乃至官爵職祿を授け、応にこれを悉く与えん。”（『大正蔵』76・638a～b）

『大黒天神法』とは、先程も述べた中国の神愷が書いた書物であるが、これは現存している。これには、大黒天がインドの大自在天であり、インドと中国の各寺に安置しているとある。大黒天神は土地の神でもあり、伽藍（寺）に安置して毎日の飯を供養すると、夢に現れて毎日千人の生活を養うと誓ったという。また、三年間供養すれば、必ず豊かな生活、また高い地位や職業を与えるとされる。

(11) “ 摩訶迦羅天の事、南海伝第一に云く、又復西方の諸大寺の所には咸く食厨（じきちゅう）の柱側において、或いは大庫の門前に在（いま）して、木を彫り形を表す。或いは二尺、三尺にして神王形となし、坐して金嚢（きんのう）を把り却って小床に踞す。一脚を地に垂れ、毎に油をもって拭き、黒色を形と為す。号して莫訶迦羅（まかから）という、大黒神なり。”（『大正蔵』76・638b~c）

摩訶迦羅天について、これは先述した義浄の『南海寄帰伝』の引用であり、西の方とは中国から見て西に当たる西域仏教の場所、またインドの辺りかと思われる。その西方の諸寺では、食堂の柱の側や大庫の門前に大黒天を彫刻して祀っており、その特徴がここに記されている。

(12) “ 先の諸の衆生、短命にして福無きも、此の（大黒）天神を祀れば延命して福を得るなり。（中略）現世には無量にして不可説の福寿を与え、来世には無上の菩提を得せしめん。其の秘密の法を成せんと欲せば、幽谷深山の蘭若（らんにゃ）、清浄の地に壇を建立して如法に修行すれば、決定して悉地成就せん。”（『大正蔵』76・639b）

もし命短く不幸であっても、大黒天を祀れば命を長らえることができて福が得られ、現世では説くことのできないような福寿が与えられ、来世にも素晴らしい悟りの境地を得られることができるという。そのためには、然るべき場所に壇を建立し修行に励むべきこととある。比叡山ではその通りに毎日祈願をしており、特に甲子の日は大黒

の日であるので『大般若経』600 巻の転読など修法をし供養をしている。

(13) 『近江輿地志略』の「政所大炊屋大黒天神像」の条

“ 此の大黒天の像は三面なり。故に三面大黒天と号す。相伝す、往古に地中より此の像を穿ち得る。云云 昔、伝教大師登山の時、大黒天神現れ、我れ此の山の守護とならんという。伝教大師云く、夫れ我が山は一念三千、三千一念の義に擬して、三千の衆徒あり、大黒天は日に千人を扶持す、豈及ぶべけんや。此の時、大黒天忽ち三面六臂と現る。伝教感喜し、その像を自刻し、此の処に安置すと云云。此の所を政所の辻という。凡そ大黒天に説々多し。吾が国の大黒天は大己貴神なり。此の処に安置するは天竺の大黒なり。”

『近江輿地志略』とは、先述した 1734 年に完成した近江の地誌をまとめた書物で比叡山に関する由緒も取り上げている。政所とは食堂、大炊屋とは台所のことであるが、そこに大黒天神像が祀られていた記録がこの『近江輿地志略』にある。この大黒が三面であることから、比叡山では三面大黒と呼ばれている。伝えるに、昔地面の中からこの像が現れたという。また、伝教大師が比叡山に登った際に大黒天が現れ、比叡山を守護すると述べたとあり、その際の伝教大師と大黒とのやり取りが記されている。

一念三千とは、我々の心の瞬間の部分（一念）を取り出しても、そこには三千にも及ぶあらゆる心の世界があるという、天台大師が見出した天台宗の基本的な理念のことである。どのような悪人でも仏のような心の部分はあり、またどのような善人でも悪の心はある。仏の心にも悪の本性を持っている。仏は悟りを開いているので悪事を働くことはないが、悪の心を持っているからこそ悪を理解することができ、悪から人を救うことができる。悪の心を持っていなければ人を救うことはできない。

そしてこの一念三千の三千という数だが、比叡山にはおよそ三千の僧、三千衆徒がおり、大黒天は日に千人を養うとされるが、それでは三千衆徒を養うことができない。すると大黒天は、三千を養うに足る、大黒、毘沙門、弁天の三面六臂で現れ、伝教大師が感喜してその彫刻を作って政所の辻に安置したのが、現在伝わっている三面六臂の大黒天であるとされている。大黒天はつまり大己貴神であり、三輪明神（大宮）として天皇を護る、比叡山で最も重要な神の一つである。

10. 「比叡山の大黒天」のまとめ

比叡山の大黒天については、特に十四世紀に比叡山の伝承記録を集大成した『渓嵐拾葉集』に詳細に述べられている。大黒天は摩訶迦羅天とも呼ばれ、唐僧義浄の『南海寄帰内法伝』（691 年）や同じく唐代神愷の『大黒天神法』（『大正蔵』21・355）によれば、インドの「大自在天」（シバ神）の変身とされ、また大地の神「堅牢地天」の化身とも言われ、インドや中国など西域では老翁の姿で、烏帽子をつけ、左手に袋（金嚢）を持ち、右手に槌を持つ尊形であったという。ただ持ち物については諸説があり、

袋・槌のほかにも如意珠・智剣・宝棒・鉾・斧などの三摩耶形が挙げられている。また黒色の三面六臂の大悪忿形の姿もあり、『孔雀明王経』によれば、人の血肉を喰う闘諍の神として群賊の怖れを除く神としても信仰されていた。大黒天を信仰し奉祀し供養する功徳については、毎日千人の衆を養い、世間の富貴や官職などを授かり、また現世には延命、福寿を得、来世には無上の菩提（悟り）を得ることができると説かれている。

しかし、比叡山で伝承されている大黒天は比叡山の開祖伝教大師の感見によるものであり、山門独自の大黒天信仰として確立されていった。『渓嵐拾葉集』によれば、伝教大師が比叡山を開かれる折、大地が六種に振動して、下方より一人の老翁が涌出したのが大黒天であるという。これは『法華経』従地涌出品第十五の霊験を転用したものであり、大黒天の本地を釈迦如来とし、さらに本地垂迹説思想から三輪明神大己貴神（大比叡山王）と同体とする根拠をなすものである。

さらに、比叡山では大黒天と諸仏・諸菩薩・諸明王・諸神との一体説が唱えられているが、三面六臂ということから、毘沙門天・弁才天との一体の姿、すなわち三面大黒天として信仰されることとなった。

この大黒天はインド・中国の伝統を継承して、比叡山の政所（食堂）に比叡山の三千衆徒を養い、富貴・福寿をもたらして下さる神として祀られることとなったのである。

11. 神仏のこころ「道心」とは

神・仏の心とは一体何か。仏教では、佛の御心を「道心」と呼ぶ。インド古代のサンスクリット語（梵語）ではボディチッタといい、ボディとは菩提であり仏の悟りを意味し、これを「道」と翻訳した。チッタは心の意であり、この「ボディチッタ（悟りの心）」を「道心」と訳したのである。これは５世紀初頭、鳩摩羅什三蔵（クマーラジーヴァ）という亀茲国（現ウイグル自治区クチャ県）出身の僧が、インドの経典を中国語へと翻訳したものである。父親がインド人、母親が中央アジア系で、インドと中国へ留学しそれぞれの文化を深く理解した素晴らしい翻訳家で、『阿弥陀経』や『法華経』などさまざまな経典を中国で翻訳している。

元々御仏の心を道心と呼ぶのであるが、これまで述べてきたように神と仏は一体、同体であるため、神仏の心を「道心」と呼ぶことができる。この道心を特に重要視して取り上げてきたのが伝教大師最澄である。最澄によって書かれた真筆が国宝となっている『山家学生式』という書物には、比叡山の人材育成の根本理念が示されているが、その中の一節には、「国宝とは何物ぞ、宝とは道心なり」と述べられている。国宝とは金銀財宝や立派な建造物などではなく、本当の宝とは人の心であり、道心を持つ者こそ国の宝である、ということである。

御仏の心とは何かと問われると、なかなか説明し難い部分があるかもしれないが、人間として生まれ仏となった釈迦を例に挙げて考えてみたい。釈迦は約 2500 年前にシャカ族の王子としてカピラ城で生まれ耶輸陀羅姫と結婚し羅睺羅という子息もいたが、29 歳の時、人々の生老病死の苦しみを救うために、自身の立場も妻子も捨て一介の修行者として城を出た。その後、真理を求め、自らを完成していくために山の中で様々な苦行を 6 年続け、35 歳で悟りを開く。しかし、それで仏といえるわけではない。そこから 80 歳で亡くなるまでの約 45 年間、釈迦はインド全国を周って人々の苦しみを慈悲によって救済し、仏と呼ばれた。「慈悲」の「悲」とは人々の苦しみ悩みを何とか救おうとするあわれみの心であり、「慈」とは自分の得たものは共に分かち合い、他に与えたいという慈しみの心のことである。つまり仏の心とは大慈悲心なりということである。自らを完成していく中で、たくましく、また、優しく他を思いやる心、これが仏の慈悲の心である。人の中にはあらゆる心があり、仏の心も悪の心もある。その中で、善なる仏の心をいかに育み、自分のものとしていくか、これが道心を説く最澄が目指したところである。

前出の『山家学生式』では、この道心にまつわる物語も語られている。

“ 古人の言く、径寸十枚是れ国宝にあらず。一隅を照らす此れ即ち国宝なり。”

これは中国の古い書物である『史記』に書かれてある言葉である。紀元前 4 世紀頃、中国の戦国時代に斉という小国の威王に対し、隣国の大国、魏国の王がある質問をした。「私の国には径寸（宝珠）が十枚ある（宝物を持っている）が、あなたの国にはどれくらいあるのか。」これに対し威王は、「私の国ではそのようなものが宝物ではありません。私の国には土地を守る部下や、教育や商売などあらゆる分野で力を発揮してくれる人々がいる。こうした人々がそれぞれの持ち場で一隅を照らしてくれているからこそ、千里の国が栄えているのであり、人材こそ国の宝なのです。」（趣意）と答えたという。

最澄に言わせれば、それは道心があって初めて出来ることだということである。

また以下のようにも述べている。

“ 古哲又云く、能く言いて行うこと能わざるは国の師なり。能く行いて言うこと能わざるは国の用なり。能く行い能く言うは国の宝なり。”

国の師は、行動には移さないがよき教えを言葉で示し導いてくれる。また言うことはできないが行いで示し実行力があるのは国の用（働き手）である。そして両方ができるのが国の宝であり理想であるが、国の師、国の用のいずれも大事な宝であるとの意味がある。また両方ともできない者は賊であるとも説かれている。

さらに以下のようにある。

“ 道心あるの仏子、西には菩薩と称し、東には君子と号す。悪事を己に向え、好事を他に与え、己を忘れて他を利するは慈悲の極みなり。”

道心のある者のことを仏子や菩薩と呼ぶ。どれだけ苦しんだり悩んだり悪事を働いたりしたとしても、志や仏心を持てば皆、菩薩となることができる。これが最澄の教えである。西とはインドのことであり東は中国のことであって、中国では道心ある者を「君子」と呼ぶが、言い方は違えど皆同じことであり、人は道心を持つべきだと説いている。

道心のある人とはどういうことかが続けて述べられているが、悪いことは自分が引き受け、好いことは皆に分け与え、見返りを求めず己を忘れて他の為に尽くす無償の愛が、仏の心としての慈悲であり、善なる行いの最も優れた内容であるという最澄の教えである。

最後に伝教大師最澄の戒めの言葉を見てみよう。

“ 道心の中に衣食（えじき）あり、衣食の中に道心なし ”（伝教大師聖句『伝述一心戒文』所収 伝教大師全集一、641 頁）

衣食（えじき）とは、衣食住のことである。道心を持っていれば自分の生活は必ず豊かになるが、衣食のことばかり考えていたら、自らの心の中に大切な仏の心を失ってしまうことになる。これが最澄の戒めの聖句として残っている。

神や仏の心を自らの心としていくこと、神仏の心を異次元のものと捉えるのではなく、「自らのもの」としていくことを目指すのが、比叡山の教えである。

おわりに

これまで神と仏の関係について述べてきたが、比叡山で祀られている大黒天や毘沙門天、弁財天などの神々はインドの神である。新羅の神で言えば、日本で祀られているのは赤山明神である。泰山府君という説もあり、色々な説があって不明な部分もあるが、比叡山では赤山明神を仏教の守護神としている。円仁の『入唐求法巡礼行記』によれば、赤山では龍宮といって龍の神が祀られており、龍への信仰があり、『法華経』提婆達多品とも関連している。もしかしたら、赤山明神は龍神であった可能性も考えられる。また、日本には古代より八百万の神々が存在する。

こうした多くの神々を受け入れ、仏と密接な関係を築いてきたのが比叡山の仏教である。伝教大師最澄が比叡山を開いた当初は守護神に過ぎなかったのかもしれないが、

やがてそれは単なる守り神ではなく、神と仏は本質的に変わらない一つのもの、一体不二のものであるとされ、神仏習合思想、本地垂迹という思想が平安時代〜鎌倉時代にかけて日本で確立されていった。

それは伝教大師最澄、慈覚大師円仁など初期の比叡山仏教を確立していった祖師方の深い神々への信仰に端を発するものであり、これによって日吉山王社の飛躍的な発展に繋がっていった。平安時代には山王三聖から七社となり、鎌倉初期までには山王二十一社が成立している。そしてそれらの神々に対する本地仏が確定し、神と仏が一体なるものとして信仰されてきた。これが比叡山の仏教である。

振り返ってみると、我々は日常生活において神と仏を何の分け隔てなく信仰していることが分かる。例えば、彼岸、盆、節分などは仏教行事である。あるいは祇園祭や神輿を担ぐ全国各地の祭りは神道の行事である。いずれも何の違和感もなく自然に我々は受け入れて生活している。これはまさに神と仏が混在する日本の文化そのものであるが、その根本理念は、比叡山で培われていったものであると結論づけることが出来るのではないであろうか。

（2019 年 7 月 6 日、生活美学研究所本年度甲子研究会における講演に基づく）

コーディネーター　武庫川女子大学生活環境学部教授　黒　田　智　子